慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	J.V. Luce, Homer and the Heroic Age
Sub Title	
Author	真下, 英信(Mashimo, Hidenobu)
Publisher	三田史学会
Publication year	1984
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.53, No.4 (1984. 3) ,p.85(351)- 89(355)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19840300-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

J. V. Luce;

Homer and the Heroic Age.

Pp. 200. 136 illus.

Thames and Hudson, London 1975. £8.00.

真下英信

数々の珍しい写真やギリシアの片田舎の美しい風景が載っており、未だギリシアを訪れた経験のない人も様々な想をかきたてられる楽しい本と思い本書を買ったのは今から何年前であったろうか。当時、内容は恐らく通俗的なものにすぎないと思い込み、写真を通覧しただけで本棚に入れてしまった。しかし、今回、改めて繙いて驚いた。内容も素晴しく、ホメーロス考古学の優れた入門書である。ホメーロスに関心を持っている人のみか、これから考古学的或いは歴史的にホメーロスを調べようと考えている学部の学生には特に恰好の入門書になると思われるので、少し古い本だが、敢えてここに紹介したい。

本書の目的は、ホメーロスの詩に歌われている伝承はそもそもどれ程信頼に価するかを検討することにある。「ホメーロス問題」の中でもとりわけ大きなこの問題を、著者はホメーロスの詩、線文字Bの世界、考古学の成果を縦横に駆使し、簡潔な言葉で要領良くまとめている。それに依ると、ホメーロスの伝える伝承は、詩人と同時代の社会を含めて、トロイ戦争、さらにミケーナイ世界に遡る様々の要素から混成されている。しかも、確かにホメーロスに歌われている世界にはミケーナイ社会以後の要素も在るが、基本的には青銅器時代に実際に生起した事件、年代的に言えば紀元前千百年以前の社会の実態や出来事が反映していると考えられ、ミケーナイ世界に関するホメーロスの伝承の信憑性は、過去五十年間にわたる考古学的研究の成果によって弱められるよりはむしろ強化されたとの見解が著者の言わんとする所である。

従って、学説史的に見ると、著者は M. P. Nilsson (*Homer and Mycenae*, London 1933. repr. New York 1968) や T. B. L. Webster (*From Mycenae to Homer*, London 1958. 2ed. 1964) に代表される所謂「連続説」に立っており、ホメーロスの詩はミケーナイ社会の解明の手掛にはならないとする M. I. Finley (*The World of Odyssens*, Harmondsworth 1954; "Homer and Mycenae: Property and Tenure" *Historia* VI (1967) p. 133-159) や G. S. Kirk (*The Songs of Homer*, Cambridge 1962) そして A. Heubeck (*Die Homerische Frage*, Darmstadt 1974) などの「断絶説」には与していない。

因に、この問題に関しては、Wace-Stubbings (ed.) *A Companion to Homer*. p. 452-462, *CAH*. II. 2 (3ed. 1975). Chap. XXXIX(b) や *RE*. Suppl. XI. *sv*. Homeros cols. 750-757 などと並んで D. Gray 論文 (M. Platnauer (ed.), *Fifty Years of Classical Scholarship*, Oxford 1954, p. 24-37) も今なお初学者にとって良き入門書であるので、好学の士にはぜひ一読を勧

めたい。

なお、著者の Luce は1920年生れ、ダブリン大学のトリニティー・カレッジの古典学の教授で、諸論文の外、単行本としては *The End of Atlantis: New Light on an Old Legend* (London 1969) の著者として広く知られている。

次に、本書の内容を章を追って簡単に紹介しよう。

まず、序論では〝ホメーロス考古学〟とは何か、如何なる問題を扱うのか、考古学と歴史学との関係は何かなどを述べている。そもそもホメーロスを論じる事自体が頗る難問であるとしながらも、『イーリアス』と『オデュッセイアー』はホメーロスなる一人の人物の作品であり、彼はイオニア生れで紀元前八世紀後半の人としており、著者はホメーロス実在説、統一派的議論を展開している。但し、本書の目的は、これら「ホメーロス問題」をめぐる諸問題の網羅的な検討ではなく、過去百年にわたる考古学的発掘に照し合せてホメーロスに歌われている伝承を分析し、そこに如何に多くの史実が含まれているかを提示する点にある。

「ホメーロスと考古学者達」と題する第一章は、古代から今日に至るまでホメーロスの詩と史実の関係がどの様に考えられて来たかを概観した後に、シュリーマンの略歴、トロイ、ミケーナイ、チリンス等の発掘活動を述べている。そして、彼に続くデルプェルト、ブレーゲン、ウェース達の業績によって改めて、ホメーロスの詩と真実の解釈が焦眉の問題となった経緯を回顧している。著者に依れば、ホメーロスの詩はミケーナイ時代、トロイ戦争の時代、暗黒時代さらにホメーロス自身の時代などの様々の層から成立しているが、その核心には史実が横たわっている。

続く第二章「ミケーナイからホメーロスへ」では、ミケーナイ時代の全盛期から紀元前八世紀に至る時代の歴史を検討する。ミケーナイ世界はペロポンネソス半島を中心としているが、ボイオティア、アテーナイにも重要な中心があった。また、西はイタカ、ケパレニア、とりわけ東方に拡大しており、キプロス、エジプトとも接触していた。しかしながら、〝ミケーナイ帝国〟の名をもって当時の社会に統一的国家が存在したとする見解は誤りである。

なお、ミケーナイ社会の崩壊原因は何か、定かではない。しかし、気候変動説や外敵侵入説よりも内紛説の方が伝説とも一致しており崩壊理由としては蓋然性が高い。ミケーナイ文明は紀元前千百年には完全に消滅したが、著者はそれに続く暗黒時代の意味や特徴を論じる。当時、人口は激減し従来の諸技術も消滅し、オリエント世界との交流も途絶したが、新な文化が急速に発展、新しい陶器の製法や鉄器の普及が見られた。また、東方への植民も進んだ。アテーナイの王コドロスの息子ネーレウスによるミレトス市設立の伝承は、考古学的研究成果からしても信じるに価する。

続いて紀元前八世紀、ホメーロスの時代を論じる。ここで、彼の詩について、分析派、統一派それぞれの立場の利点、欠点を指摘してから、パリーやバウラの研究を概観しながら、著者は口承叙事詩には古い歴史が伝えられており、ホメーロスの詩にも同様に種々の時代の要素が混在していると主張する。

では、何時の時代のどの様な要素がホメーロスの詩の中には歌われているのであろうか。続く第三章「ホメーロスの詩の重複的世界」では、詩に埋もれている各時代層を抽出し、それをミケーナイ時代からホメーロスの時代に至るギリシア世界の発展の流の上に位置付ける試みがなされている。本章は次の第四章と共に著者の主張ならびに手腕が見事に発揮されている所である。

ホメーロスの詩に見られる、家具など日常生活に用いられる数々の調度品の描写にはミケーナイ時代の宮廷生活が如実に示されている。詩にしばしば歌われている象牙、風呂、コハクなどもミケーナイ時代の遺跡から発見されている。他方、交易に従事しているフェニキア人の描写は、紀元前八世紀の世界を反映している。

ところで、ミケーナイ時代は青銅器中心ではあるが、鉄も既に貴金属として用いられていた。ホメーロスも青銅器文化の世界を歌いながら鉄に言及している。鉄と青銅が同時に用いられている事実は、青銅器時代から鉄器時代への移行期を反映していると言うよりも、むしろ、基本的には鉄器時代に生きていた詩人が単に伝統的な詩句を用いて青銅器時代の世界を描いている事に起因する。逆に言えば、叙事詩の世界には青銅器時代に遡る伝承が組み込まれているのである。

第四章「描写と記録：ホメーロス理解の若干の問題」は本書の主題とも言えるもので、著者は、ホメーロスの詩と線文字Bから浮上して来る社会像は基本的には整合していること、「船のカタログ」や「トロイ軍の陣容」は史実を示しているとの立証に尽力している。まず、ホメーロスの世界と線文字Bの社会の関係については、両世界には相違も在るが、土地制度、王権、宗教、戦車、人名、埋葬方式等に見られる如くに、相違点より類似点の方が大きい。ホメーロスの世界はミケーナイ時代のそれを反映している。一般には、線文字Bの世界は極めて高度に組織化されているのに対して、ホメーロスの社会には文字もなくより単純な世界であったと想定されている。しかし、著者に言わせれば、線文字Bの世界はミケーナイ社会の一面を示すのみで、ピュロスに代表される官僚機構は、オリエントから輸入された上部構造でしかなく下部社会は地方の族長が支配していたのである。

この点に関連して、「断絶説」の旗手たるフィンレーは、オデュッセイアーの世界を形成する重要な社会的要素であるclass, kin, household の出現は暗黒時代であり、かつオデュッセイアーにしばしば歌われている贈物の交換は紀元前十、九世紀のより未開な社会の慣習としている。しかし、著者は、これらいずれもミケーナイ社会に存在したと考えている。しかも、軍隊の記述形式、wanax なる王の呼称、私有と共有の二本立てに立脚した土地制度、封建的社会制度、宗教、墓地の形態などいずれも両世界の近親性を示している。また、「船のカタログ」(*Il.* II. 494-759)、「トロイ軍の陣容」(*Il.* II. 816-877) は、共々正確にミケーナイ時代の状況を伝えている (*cf.* R.H. Simpson-J.F. Lazenby, *The Catalogue of the Ships in Homer's Iliad*, Oxford 1970)。

「武器と戦争」と題する第五章は、ホメーロスの用いている形容句や様々の武器の描写と考古学的資料を比較検討している。

剣、スネ当て、カブト、ヨロイなどの武具を逐一検証した結果、弓兵の重要性と戦車の用法を除いて、武器の面でもホメーロスの世界とミケーナイ社会は一致している。武器、戦争の叙述に於いても、詩人は史実を伝えており単なる空想で描写しているのではない。

第六章の「トロイとトロイ戦争」は、これまでの著者の主張から予測される如く、トロイ戦争実在説の上に議論が展開されていく。まず、古来議論の的となったトロイの位置に関連して（上述の *A Companion to Homer*, p. 362-386 参照）、著者はホメーロスに歌われている風景、形容句や考古学的成果を綜合しながらトロイの町を確定する。ここでも、著者の詩人への全幅の信頼が大きな特徴となっている。

次に、トロイ戦争は LMIIIB から LMIIIC への断絶期に勃発した事件で、トロイ VIIa 市の破壊が歌われていると述べている。その年代は紀元前千二百年頃と推定され、ギリシア人が考えていた年代と大旨一致する。戦争原因は定かでないが、勿論、ヘレンの誘拐が事実を説明するものではない。恐らくは、ギリシア人の小アジアへの政治的経済的進出が原因であった。すなわち、ヒッタイトが弱体化し、小アジアから後退して行くと、既に小アジア南西部を支配下に置いたギリシア人は、小アジア中部にさらに勢力を拡大しようとした。そして、小アジア中部にあった Assuwa 王国を包囲するべく、その北部にあったトロイを攻略したのである。

ところで、トロイ陥落にまつわる有名な木馬伝説については、合理的解釈など幾つかあるが、著者は、詳細は不明としながらも何か異常な事態が生じた事実がこの伝承の裏にあったに相違ないとしており、伝承への過剰なまでの信頼がここにも示されている。

第七章「イタカ」は、オデュッセウスの故郷イタカが今日のどの島に当るか論じている。この問題については、Wace-Stubbings, *op. cit.* p.398-421 が有益である。トロイと同様、イタカがどこにあったか古来議論の的になっている。デルプェルトはイタカすなわちレウカス島説を主張したが、著者に依ればこの見解は誤りで、今日のイサキ島こそオデュッセウスの故郷である。ホメーロスが用いているイタカの形容句は、今日のイサキ島に相応しく、詩人はその地理、風土を極めて正確に描写している。例えば *Od.* XIII. 96-112, 408; XIV. 1-2; IV. 844-847; XVI. 365-368 などいずれも正確にイタカの地理を描写している。加えて、考古学的発掘の成果とも一致する。従って、詩人がイタカを訪問したとの伝えも疑う理由はない。

「ホメーロスの世界の周辺について」と題する第八章は文字通り詩に歌われている辺境地域の描写にどの位史実が反映しているのか考察している。詩人はエーゲ海の内側は比較的正確に記述しているが、その外側の世界は俄然もうろうとした世界となりその中にキプロス、フェニキア、エジプトが微かに浮び上がって来るのみである。この内、エジプトとの関係は、ミケーナイ時代の両国の交流が、フェニキアとの交流は暗黒時代のそれが反映している。

さらに、オデュッセウスの流浪譚も単なる空想ではない。〝流浪譚は実際の航海記録ではない。しかし他方、詩は恐らくは事実から全く離れたものではない〟(p. 162)。勿論、キュクロプスの国や、カリュプソーの住む島など全てが確定出来るわけではない。だが、シシリーやリパラ諸島方面ともミケーナイ時代のギリシア人は交易しており、当時の西方への関心が流浪譚にも反映している。例えば、スキュレーやカリュブディスの伝えはメッシーナ海峡、プランクテーはリパラ諸島の火山島が関係している。また、ミケーナイ時代、コハク、銅、錫の交易にあたり北方との交流があったが、北ヨーロッパの状況を示すと考えられているライストリュゴン人の伝えも、暗黒時代より青銅器時代の名残である。オデュッセイアー十一巻の「招魂」もアケロン川とコキュトス川の合流点であるメソポタモス地方の状況が反映していると著者は考えている。

他方、新しい時代の要素として、紀元前八世紀から始まるエウボイア人の西方への植民活動が *Od.* XXIV. 304-307 の作り話しなどに反映されている。

終章「ホメーロス的伝承」は叙事詩の性格を論じる。ホメーロスの詩は針小棒大に誇張された世界に過ぎないとする見解があるが、これは考古学者による発掘成果に照し合せれば解る様に正しくない。ホメーロスの詩には、青銅器時代のギリシア世界に実際生じた事件やその社会の実態が歌われており、しかも詩人は意外と正確に伝えている。丁度、中世の騎士物語の核には史実が横たわっているのと同様に、ホメーロスの詩にも歴史的な根拠がある。トロイ戦争がなかったとか、トロイ VIIa 市は名もない夷狄によって亡されたとするよりも、伝説と考古学の成果を読み合せれば、伝説を信じた方がより合理的である。

次に著者は、パリー・ロード説に基いて叙事詩の発展を論じた後で、ホメーロスの魅力は何か考察している。彼によれば、それは言葉使いの美しさと適切さ、人生観にみられる度量の広い理想主義、真実の生み出す甘美な飾りにより絶えず高められる詩の魅力と高貴さの三点にある。

最後に評者の一言。前述の *CAH* にも見られる如く、最近「断絶説」が有力になっているが、評者は本書と同様詩の背後にはやはりミケーナイ時代の史実が隠されていると考えた方がより妥当ではないかと素人ながら思っている。本書の作者は、種々の問題に関して時には保留条件を付したりしその都度穏当な見解を慎重に展開している。その力量は賞賛に価する。

だが、オデュッセウスと言う極めて強靱な性格を持った一人物の冒険譚とか百六十四地区から四十六人の指揮官の下に集結した千百八十六雙の船からなる総勢力を記した「船のカタログ」を思い浮べた時、やはりそこには史実が反映しているとの一言では片付けられない問題が横たわっているように思えてならない。なぜなら、例え「連続説」に与したとしても、叙事詩の世界のどこまでが史実なのか、どこまでが後世の詩人が付加した世界なのか、どこまでが虚構なのか本書の努力にもかかわらずこれらの問題を客観的に分離明確化する基準は、やはり確立されたとは言い難いからである。

(83. XI. 23)